

候ぬ。六十卷になしなど申は天のせめなり。謗法の科の法花經の御使に値て頭れ候なり。

又此沙汰の事も定てゆへありて出来せり。かしまの大田次郎兵衛・大進房・又本院主もいかにとや申ぞ。よく／＼きかせ給候へ。此等は經文に子細ある事なり。法花經の行者をば第六天の魔王の必障べきにて候。十境の中の魔境此也。魔の習は善を障て悪を造しむるをば悦事に候。強て悪を（造らざる）者をば、力へ及ばずして善を造しむ。又二乗の行をなす物をば、あながちに怨をなして善をすむるなり。又菩薩の行をなす物をば遮て二乗の行をすむ。最後に純円の行を一向になす者をば兼別等に墮なり。止觀の八等を御らむあるべし。

又彼云、止觀行者は持戒等云云。文句の九には、初・二・三の行者の持戒をば此をせいす。經文又分明也。止觀に相違の事は妙樂問答（之有り）。記九（見るべし）。初隨喜（二有り）。利根の行者持戒を兼たり。鈍根は持戒（之を暫しす）。又正像末の不同もあり。撰受・折伏の異あり。伝教大師の市の虎事思合すべし。此より後は下総にては御法門候べからず。了性・思念をつめつる上は、他人と御論候わばかへりてあさくなりなん。

彼了性と思念とは年来、日蓮をそしるとうけ給る。彼等程の蚊虻の者が日蓮程の師子王を（聞かず見ず）して、うはのそらにそしる程のをこじんなり。天台法花宗の者ならば我は南無妙法蓮花經と唱て、念仏など申者をば、あれはさる事など申だにもきくわいなるべきに、其義なき上偶申人をそしるでう、あらふしぎ／＼。